

新科学館 展示・運営検討会における 意見のとりまとめ

1 コンセプトについて

- 北九州市らしい科学館とし、ここでしか体験できないものとする。
- 博物館とは異なる、未来に向かうというコンセプトとすること。
- 科学館の本質は「科学の面白さ」を知ってもらうことであり、北九州市の産業史を取り上げるのは良いが、博物館的になりすぎないように注意すべき。
- 新しい学習指導要領では、幼児教育との繋がりを強く意識している。新科学館のコンセプトにも未就学児等を意識しているということを打ち出すべき。
- 現在の子ども達にとって、宇宙は身近な存在になっており、「宇宙への憧れ」といったコンセプトは時代遅れ。

2 仕様・機能について

- バリアフリーにしっかりと対応した施設とすること。
- 集客の仕掛けとして、入口付近にキッズコーナーの設置を検討されたい。
- 小さな子ども連れや団体の来館者に対応した食事や休憩スペースが必要。
- エレベーターについても科学館らしい仕掛けを検討されたい。
- 科学館で興味を持ったことを、後に自分で調べることができる仕組みを。
- 今の子どもは「YouTube」等、インターネット上の動画で情報を検索するため、「調べる」・「考える」仕組みは、ネット検索や動画の充実を検討されたい。
- 音声ガイドではあまり内容が頭に入っていない。アテンドをつけたツアー形式で全体を見学できるような仕組み等も検討されたい。

3 展示について

- 「じっくりと考え続ける」という力を身につけるため、考えるという行為、考えて分かるという経験が必要。考える展示においても、体験・体感の要素を入れるべき。
- 「感じる」、「考える」、「腑に落ちる」という流れが考えられるが、感じるだけの人と、腑に落ちる人が共存できるような展示の仕組みを検討されたい。
- その場で終わるのではなく、家庭にも続いていくようなコンテンツの設置を。
- スロープ等により展示を見ながらフロアを移動するような演出も検討されたい。

- 展示分野は、物理に偏らず、化学についてはサイエンスショー以外にも、例えば周期表を学べるような展示を取り入れること。
- 1階展示はパネルやポスター展示ではなく、デジタルサイネージ等の利用でワクワク感を演出し、2階展示へのモチベーションにつなげるべき。
- 体験できる展示をメインに検討されたい。
- 身近な暮らしの科学等、自分の生活との繋がりを感じさせるような展示やその原理の解説等を検討すべき。
- 竜巻に関して、ウィンドシミュレーターのような風を感じられる展示を設置すべき。
- 北九州市のモノづくりの多様性や、世界レベルの技術を持つ企業などを紹介すべき。
- 東田第一高炉においても、製鉄の歴史を取り扱っており、新科学館で北九州市の産業史を取り入れる必要があるか疑問。
- 展示フロア内にサイエンスショーのスペースを設けるアイデアは良いが、移動可能な台や電源、プレゼン設備が必要。

4 教育普及活動について

- 教室、ワークショップは集客にも重要。企業やNPOとの連携も行いながら、活動メニューの幅を広げること。
- 実験教室等は、企業に対し、社会的貢献の一環として協力を依頼すること。
- 子ども達の放課後の居場所づくりといった観点も検討されたい。
- 中学生のICT機器を利用した情報提供の仕組みなど学校教育との連携や活用策は教育委員会とも今後協議しながら検討されたい。
- クラブ活動やロボット教室等については今後も継続すべき。

5 プラネタリウムについて

- 初期整備費用だけではなく、長期的なランニングコストにも配慮すること。
- ドーム径だけでなく、機器やプログラム等の質で勝負すべき。
- 各メーカーや機器ごとに得意分野が異なるため、評価基準を明確にしておくことが必要。

6 運営について

- 直営・指定管理の運営方式に関わらず、マネジメントや企画が出来る人材を配置すること。
- 専門的な科学知識を分かりやすく来館者に伝えるサイエンスコミュニケーターについては、具体的な役割や運用を整理すること。
- コストや運営における柔軟性の面からは指定管理が望ましいが、運営方式については、直営や指定管理等のメリットとデメリットをきちんと整理し、比較して検討されたい。

7 北九州イノベーションギャラリー（K I G S）について

- 実験室は学校と同じレベルのものでは意味がない。ここでしか体験できないことを前提に面積・設備を想定すべき。費用の問題もあるが、電子顕微鏡等の設置を検討されたい。また、機器の収納スペースも十分確保すべき。
- 交流室のスペースを大きく取って、学校等の団体利用がないときには一般開放することも検討されたい。
- 小学校の授業や教員向けの実験の研修の場として使えると良いのではないか。
- 「科学」から「技術」に興味を持つ子どもを増やしていくために、科学館からK I G Sへ科学に興味のある子ども達を誘導するような仕組みが欲しい。
- いつでも気軽に立ち寄って作業できるようなスペース・環境が欲しい。
- 科学館で展示するものをK I G Sの工房で作るのはどうか。
- ドライバー等の工具の使い方を知らない子どもも多いので、そうしたことを教えるのも良いのではないか。
- 化学の実験を行うのであれば、薬品等の管理体制を整える必要がある。

8 東田エリアの連携について

- 新科学館は「東田ミュージアムパーク」を実現する好機。
- いのちのたび博物館や環境ミュージアムとの展示内容の棲み分けや周遊できる仕組みづくりなど、連携方策をしっかりと考えること。
- 他館との企画展示でスケジュールを合わせるなど、ソフト面での連携を検討されたい。
- 各ミュージアムと連携を強化するため、シャトルバスの運行や協議会の設置なども検討されたい。

9 その他

- 名称を公募するのであれば、語感だけで選定するのではなく、コンセプトとズレることがないように留意すること。
- 目標来館者数については、いのちのたび博物館を目安にした 50 万人は分かりやすいが、現状の 5 倍であるので、2 年目以降の落ち込みも考慮すべき。
- 若い世代などこれまで対象としていなかった層の取り込みも大切だが、目標数の設定や運営戦略を考える際にターゲットの優先順位をつけることが必要。
- ターゲットエリアは市外県内や山口県、大分県の一部までを意識すること。
- 北九州らしさを考えるならば、北九州市は理系が多いと思われるようなところまで目指すべき。科学館との直接の因果関係の説明は難しいと思われるが、学力テストの理科の平均点を引き上げるといった指標も検討されたい。
- タコマ、ノーフォークなどの姉妹都市の博物館と連携・提携ができれば良いのではないか。